あつまれ みんなの 力作

『マンモス』

※マンモスのマがうまく書けたと思います。モのおれがむずかしかったです。

1年
庄司　愛さん

※紙粘土で絵をかいたよ。私の大好きな子犬だよ。おしゃれな首輪もつけたよ。

『かわいいこいぬ』

『雨　雲』

5年
前澤可奈美さん

※私は、習字で雨雲を書きました。なぜかというと、むずかしい字だからです。

『きれいなアクセサリー』

2年
川野紗也加さん

※おまつりで、わたしはアクセサリーやさんをやりました。とってもすてきでしょ。

6年
仲村　沙織さん

※四文字すべてのバランスがよく整って書けています。ていねいな作品です。（評）

『外国文化』

『へんそう大会』

3年
小川絵理奈さん

※私はねこのお姫様に変装しました。そして、大きな家に住んでみたいです。

白浜小学校

ひかり俳壇

梳る髪にかすかな焚火の香　布施　和代（二又）

中七以下の措辞が火炎の凄じさを連想させる。省略が効いた余韻深き作品である

目で食べる紫紺の深き秋茄子　布施喜美雄（二又）

日本料理の賞味は視覚からという。糠味噌漬の濃紺色のナスには誰れしも食指が動く

老いて尚仲睦まじく落葉焚き　鈴木とし子（宝米）

階老同穴を地で行くようなお二人の日常が素直に伝わるが、中七の表現は詩語に向かず

オッペシが焚火の種を頒ち合ふ　川島　重一（尾垂）

喪の家の庭に構へし大焚火　越川せつ子（篠本）

地上這う煙に噎せる夕焚火　山崎　てい（二又）

豪快にあげて漁師の朝焚火　椎名　静子（二又）

境内を浄めて温もる焚火かな　伊藤　雅子（尾垂）

雲切れて歓声の湧く照紅葉　伊藤　幸枝（尾垂）

評者吟
若き日のレターも焚きし焚火跡　椎名しげる